

令和2年度病虫害発生予報第7号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
ダイズ	吸実性カメムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 やや多
カンキツ	貯蔵病害（緑かび病、青かび病） ミカンハダニ	やや多 やや少
カキ	炭疽病	やや少
果樹の共通害虫	カメムシ類	やや多
キャベツ	黒腐病 べと病	並 並
ブロッコリー	黒腐病 べと病	やや少 並
レタス	萎黄病	並
青ネギ	軟腐病 疫病 ネギハモグリバエ	やや少 やや多 並
ニンジン	黒葉枯病 萎黄病	並 やや少
露地キク	白さび病	やや多
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類 タバココナジラミ ネギアザミウマ ミナミキイロアザミウマ ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ) ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ タバコガ類 (タバコガ、オオタバコガ)	並 並 並 並 並 並 やや多 多 並

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和2年度 病害虫発生予報 第7号（10月）

A. ダイズの病害虫

1. 吸実性カメムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 9月中旬の発生量はやや多かった。(+)

(2) 普通期水稲におけるミナミアオカメムシの発生量はやや少なかった。(－)

(3) 綾歌郡綾川町の県予察灯でのミナミアオカメムシの8月第6半旬から9月第5半旬までの誘殺数は過去9か年の平均に比べやや多かった。(＋)

(4) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 水稲の収穫によりカメムシ類が移動分散する場合がありますので、圃場で散見される場合は早急に薬剤防除する。

2. ハスモンヨトウ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) ダイズでの9月中旬の白変葉の発生量は平年並であった。(±)

(2) 9月下旬の発生量は、ブロッコリー、秋キュウリ、ニンジンではやや少なかった。(－)

(3) フェロモントラップでの9月の誘殺数はやや多かった。(＋)

(4) 防除員報告ではイチゴとキャベツにおいて発生量の多い地区があった。(＋)

(5) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) フェロモントラップの誘殺状況や圃場内での本虫の発生に注意し、適期に防除を行う。

(2) 幼虫集団が食害した後は、表皮だけを残した白変葉となるか、葉脈だけを残した状態となっているので、圃場内でこれらの葉を多く見つけたら、直ちに薬剤防除を行う。

(3) 薬剤の効果が高いのは体長1 cm程度までの幼虫であるので、早期発見に努める。

(4) ふ化後間もない幼虫は集団となって食害し、その後周囲に分散するので、初期の食害発生に注意し、卵塊や幼虫集団は見つけしだい捕殺する。

B. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. 貯蔵病害（緑かび病、青かび病）

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生は平年と同様に認めなかったが(±)、日焼け果が多く、裂果も一部地域でやや多かった(＋)。

(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 収穫10～30日前に薬剤防除を行う。

(2) 収穫、選果、運搬時には果実に傷をつけないように注意する。貯蔵する前には必ず予措を行うとともに、貯蔵中は貯蔵庫内の温湿度管理に十分配慮する。

2. ミカンハダニ

予 想 発生量 : **やや少**

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 秋期のミカンハダニの果実寄生は品質の低下につながるなので、寄生を認め

れば速やかに薬剤防除を行う。

(2) 薬剤散布に当たっては、散布むらのないよう丁寧に行う。

(3) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一成分を含む農薬の使用は年1回とする。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生量は少なかった。(－)

(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布し、降雨が続く場合は、降雨の合間に散布する。

(2) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。前年に発生が確認された圃場では特に注意する。

(3) すでに収穫が始まっている品種もあることから、薬剤防除の際には収穫前日数及び使用回数に注意する。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

予 想 発生地域 : 県下全域

発生量 : **やや多** (令和2年5月22日付け注意報第2号発表、同年9月18日付け調査速報第2号発表)

根 拠 (1) 9月の県予察圃場予察灯の誘殺数は多かった。(＋)

(2) 9月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)

(3) 一般圃場のカキでの9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

対 策 (1) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。

(2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。

(3) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。

(4) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。

(5) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。

(6) 防除薬剤は、地域の病虫害防除暦等を参考にする。

(7) 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。

C. 野菜、花きの病虫害

－キャベツ－

1. 黒腐病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病

を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。

- (2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
- (3) 台風など大雨や強風の後は感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(4) 発病株は放置せずに抜き取り、適正に処分する。

ーブロッコリーー

1. 黒腐病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
(2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
(3) 台風など大雨や強風の後は感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(3) 発病株は放置せずに抜き取り、適正に処分する。

ーレタスー

1. 萎黄病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

- (2) 綾歌郡綾川町の予察灯でのヒメフタテンヨコバイの9月の誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)

- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、ヒメフタテンヨコバイの侵入防止対策を図る。
(2) 発病株は早期に抜き取り、適正に処分する。
(3) 近隣に休耕田や雑草地がある圃場では、ヒメフタテンヨコバイの発生が多くなるので、防除を徹底する。
(4) 定植時にはヒメフタテンヨコバイを対象に育苗トレイ灌注処理をする。

－青ネギ－

1. 軟腐病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は少なかった。(－)
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(3) 発生が多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消毒を実施する。
(4) 薬剤散布は7～10日間隔で行う。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 疫病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生が多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消毒を実施する。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ネギハモグリバエ

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適正に処分する。
(2) 多発してからの防除は困難であるため、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
(3) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤を施用する。

－ニンジン－

1. 黒葉枯病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 肥料切れに注意し、株の勢いが衰えないように栽培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

2. 萎黄病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) ニンジンでのヒメフタテンヨコバイの9月下旬の発生量は平年並であった。(±)

- (3) 綾歌郡綾川町の予察灯でのヒメフタテンヨコバイの9月の誘殺数の合計は過去9か年の平均並であった。(±)
- 対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り、適正に処分する。

- (2) 近隣に休耕地や雑草地がある圃場では、アブラムシ類やヒメフタテンヨコバイの発生が多くなるので、アブラムシ防除を徹底し、ヒメフタテンヨコバイの発生を少なくする。

－露地キク－

1. 白さび病

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 発病株は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、発生量が増加した場合はクレソキシムメチル等の治療剤を用いる。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、ニンジン、秋キュウリでは平年並(±)、ブロッコリー、キャベツではやや少なかった(-)。
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 今後作付を行う場合は、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を設置するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。なお作物の種類に応じて農薬登録の適用に配慮する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. タバココナジラミ

予 想 対象作物 : トマト、ミニトマト、キュウリ、イチゴ、ナス、ピーマン、ブロッコリー、ポインセチア等

発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、冬キャベツ、ブロッコリーでは平年並(±)、秋キュウリではやや少なかった(-)。
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 今後作付を行う場合は、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を設置するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。
(4) ピリプロキシフェンに対してバイオタイプQは抵抗性を示し、バイオタイプB(シルバーリーフコナジラミ)も感受性の劣る個体群を認めているので、この薬剤を含有するテープを使用する施設では、効果を必ず確認するなどの注意を払う。

3. ネギアザミウマ

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の青ネギでの発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットを張ったり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) ネギでは葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られる場合に、アスパラガスでは圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所あたり1～5頭の成虫を認めた場合に薬剤防除する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. ミナミキイロアザミウマ

予 想 対象作物： キュウリ、ナス、キク等
 発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の秋キュウリでの発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットを張ったり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵から新たに羽化、ふ化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
 (4) 本虫が媒介するキュウリ黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、適正に処分する。
 (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ)

予 想 対象作物： レタス、キュウリ、ニンジン、トマト、ミニトマト、ナス、キク等
 発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、秋キュウリ、ニンジンではやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットを張るなどして侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次の発生源になるので、圃場外に持ち出し、適正に処分する。
 (4) 施設の発生圃場では、栽培終了後、後作まで20日以上、何も植えず施設を密閉し、成虫を絶食により死滅させる。

6. ハスモンヨトウ

予 想 発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) ダイズでの9月中旬の白変葉の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 9月下旬の発生量は、ブロッコリー、秋キュウリ、ニンジンではやや少なかった。(－)
 (3) フェロモントラップでの9月の誘殺数はやや多かった。(＋)
 (4) 防除員報告ではイチゴとキャベツにおいて発生量の多い地区があった。(＋)
 (5) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 若齢幼虫は集団となって食害し、その後周囲に分散するので、初期の食害発生に注意し、卵塊や幼虫集団は見つけしだい捕殺する。
 (2) 育苗床では防虫ネットで被覆するとともに、施設栽培の場合は開口部を防

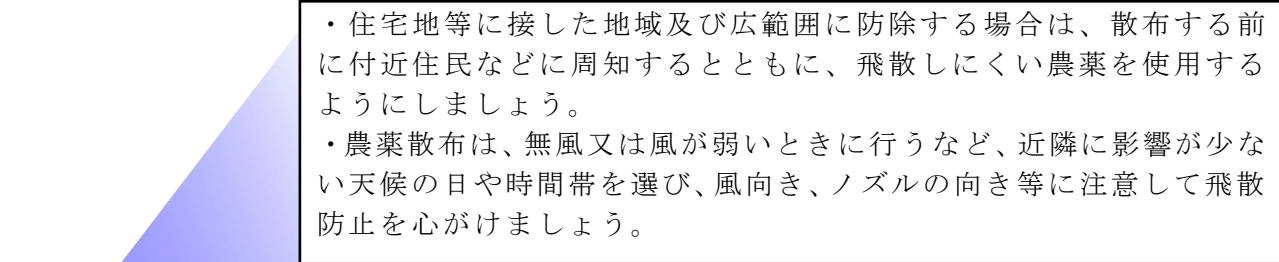
- 虫ネット（4mm目合以下）で被覆する。
- (3) フェロモントラップの誘殺状況や圃場内での本虫の発生に注意し、適期に防除を行う。
 - (4) 幼虫集団が食害した後は、表皮だけを残した白変葉となるか、葉脈だけを残した状態となっているので、圃場内でこれらの葉を多く見つけたら、直ちに薬剤防除を行う。
 - (5) 薬剤の効果が高いのは体長1cm程度までの幼虫であるので、早期発見に努める。
 - (6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

7. シロイチモジヨトウ

- 予 想 対象作物： アブラナ科野菜、青ネギ、アスパラガス、キク、カーネーション等
発生量： 多
- 根 拠 (1) 9月下旬の青ネギでの発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月の誘殺数は過去9か年の平均に比べ多かった。（+）
(3) 10月の気象は気温が高く（+）、降水量が平年並（±）の予報である。
- 対 策 (1) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣ったり、ネギ等では食害して葉の内部に潜り込むと防除効果が低下するので、圃場をよく見回り若齢期に薬剤防除を行う。
(2) 圃場内及び圃場周辺の雑草は増殖源になるので、除草に努める。
(3) 施設栽培の場合は開口部を防虫ネット（4mm目合以下）で被覆し、侵入を防止する。
(4) ジアミド系薬剤（IRACコード28）の一部の薬剤に対して感受性低下の事例が確認されているので注意する（病害虫防除所発表技術資料（<http://www.jpnpn.ne.jp/kagawa/30.htm>）等参考）。
(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

8. タバコガ類（タバコガ、オオタバコガ）

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 花き類において発生量のやや多い地区があった。（+）
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月のタバコガ類の誘殺数は過去9か年の平均に比べやや少なかった。（-）
(3) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでの9月のオオタバコガの誘殺数は少なかった。（-）
(4) 10月の気象は気温が高く（+）、降水量が平年並（±）の予報である。
- 対 策 (1) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の高い若齢幼虫期に薬剤散布を行う。
(2) タバコガ類の幼虫は、作物の果実や生長点付近の茎葉、花蕾に潜り込んで加害するので、その周辺を中心に幼虫を探して、見つけしだい捕殺する。
(3) 被害果実、被害茎、収穫残さなどは放置せず圃場外へ持ち出して処分する。
(4) 圃場内及び圃場周辺の雑草は増殖源になるので、除草に努める。
(5) 施設栽培の場合は、開口部を防虫ネット（4mm目合以下）で被覆する。
(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

- 
- ・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
 - ・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>